

# 青髭 2 2

明宏訊

ルイとアネモーネ。

二人の戦士が互いに干戈している。

本当に激しい衝突だった。

まさに青い血どうしが本気でやりあっている。その衝撃は激しく、青い稲妻が両者から迸り赤いはずの朝を紫に変えている。

これほどの戦いは、アンリはみたことがなかった。たとえ城の結界に守られていようとも、ナルボンヌの密偵に知れてしまうのではないか、そういう危惧が家臣の胸を去来する。あとの二人はどう思っているのかと視線をずらすと、ギョームは完全に魂を抜かれて見入っている。アネモーネのものすごい形相をみて、百年の恋も冷めたのかと思いきや、もっと深く恋の底なし沼に引きずられてしまったようだ。

一方、ギュスターブは、というアンリの足元で主人から叱られた子犬のように縮こまっている。

アンリは頭を抱えた。

その時である。主人の叱責が脳髓をかち割ったような衝撃があった。いざ、視線を戻すと、そなた、主君の晴れ姿から視線をそらすつもりか？不忠な！！とばかりに睨み付けてきた。

本当に、ああ、そうですか？と軽く返したい気持ちに襲われた。どうやら、日ごろのストレスが溜まっていたらしい。たしかに、この城の結界は、カルッカソム城をはるかに凌ぐ。とはいえ、さきほどから空間が軋む音がしているんですけど、大丈夫ですか？ナルボンヌがだまっていないと思うんですけど。

とうてい、主君に対して言えない言葉を心に並べて、憂さ憂さした気持ちを晴らそうとする。

だが、世紀の戦いは、この地にいる男たちの耳には非常に聞きなれた、とある女性の声で終わりを遂げた。

「あなた方は、朝から何をやっておられるのですか？」

「は、母上？」

「……………」

中庭に姿を現したのは、アンリ、ルイ、ギョームの母親であるアデラードである。このような早朝だというのに、正装である。こんな時間に目を覚まさせられた侍女にアンリは同情したくなった。

貴族の正装を、それも女性、着付けを行うのにどれほどの時間がかかるのか。それを考えれば、彼女が感情に乗せられて、いや、そもそもそういうタイプではないが、ここにまかり越したのではないことははっきりしている。

しかし、なぜ、正装？

アンリは、喉に引っかかったものを呑みこめずに、一般に母に対する貴族の礼を施す。ルイとギョームもそれに従うが、前者は、沸き起こる心臓の鼓動のせいかしどろもどろ、である。

みっともない！じっさいに、彼女はそう発語したわけではないが、実母に睨み付けられたル

イは、頭の中でそういう声がハウリングしているのではないか？彼も理解している通りに、対戦相手は汗ひとつ掻いていない。あれほどの形相で戦っていたにもかかわらず、きっとあれは必死ではなく、単純に戦いを楽しんでいただけなのだ。恐るべし……、それはともかく、アンリはそれよりずっと驚愕するような場面に遭遇することになる。

「は、母上?!」

母親とアネモーネが視線を合わせた。そのめつきは、アンリにとっては姉に当たるマリーや、ロザリーヌ、こちらは末妹だが、彼女たちに対するそれに酷似している、確かに微妙な違いはあるのだが……。

「……」

アネモーネ、もとい伯爵は気まずく視線を逸らした。なんと、このお方が、アンリにとってみれば神にも等しい主君が、たがが、元自分の参謀の妻にたいしてこのような表情をするとは驚きであった。まるで、いたずら小僧が犯行を親に見つかったような顔をしておられる。いや、それ以前に、この二人は自分たちとおなじように深い関係を築いてきたようにすら映るのだ。

「……ようこそ、わが城へ」

「これは、失礼……」

伯爵は、アデライードに近づく、貴族の礼を示した。それは、女性が身分や年齢が上の同性に対する礼儀、スカートの裾を両手で振り上げ跪く、そして、頭を下げる、それを三回ほど繰り返す、その有様を見ていたアンリは絶句するしかない。あまりにも美しいからだ。そして、主君の真意を見せつけられたような気がした。まったく芝居でも遊びでもない。母に対して、本気で誠意と敬意と愛情が入り混じった感情を抱いている。それは、人がふつうに実母に対して抱く感情ではないか。

「急な旅でございましたので、侍女たちを連れてくるわけにもいかず、正装というわけにはまいません」

「いえ、あなたなら、正装に侍女などいらないでしょう。ただし、おてんばがすぎなければ、という条件付きでしょうが……タイミングが悪かったようですね、それとも、それも計算の内でしたか？」

アデライードは、まるで娘時代はかくやと思わせる笑いを浮かべた。  
なんだろう？このなにかも互いにわかりあっているようなやり取りは？まるで、自分が知らぬ別世界において秘密を共有しているかのようだ。年甲斐もなく、親を取られたような顔を晒す。

それともこれは演劇なのか？

みな、その秘密とやらを共有していて、自分だけが知らされていないような、奇妙な気分を駆られる。

もちろん、足下で小さなって這いつくばる、我が新しい家臣は別だが。

ギュスターブ・ペリゴールは、もう、誰が、たとえばナント国王ピエール三世が来訪しようとも驚かない、という、逆に自分を怯えさせたままで安定してしまっている。非常に皮肉は話だ。そんな小さな生き物のことはどうでもいい。要は、自分の母親と主君のことだ。二人は深く見つめあっている。

二人は明らかに通じ合っている。アンリはそれを打ち切るかのように口を開いた。なかなか、この場にふさわしい言葉が見つからなかったが、朝食の用意ができているとでも言えばいいだろう。

それを実行すると、母親が不思議そうな感情を含ませた視線を送ってくる。この場にいる一斉の目が自分に向いてくる。大変に気まずいが、母親と伯爵のやりとり、あるいはパフォーマンスがえんえんと続くよりはましだ、とおそらく同意だろうと思って二人の男子の方向をちらりとやる。

ルイは、少なくとも兄とほぼ軌道を同一にしているようだ。しかし、ギョームはその限りではなかった……いや、彼とまったく違う、むしろ、軌道を外れて流れ星になってしまっている。

あこがれの、アネモーネ嬢に視線は釘づけになってしまっている。アンリは危惧した、これから恐るべき行為に彼は出るのではないか？彼の青い目はやがて焦点が合わなくなってきた。もう、これ以上、わけのわからない芝居をみせつけられるのはごめんだ。「そろそろ、朝食の用意ができているころでしょう、母上、アネモーネもおいで……」

「あ……?!」

兄の言葉に敏感に反応したギョームは、思わず我に返った。その顔は、同性で、しかも、実の兄の視点からでも十分に美少女に見えた。

「そうだ、まだ、みなに紹介していなかった。母上、こちらは、ヴァロア家のアネモーネ・ド・ヴァロア……」

「ちょっと、待った！まだ勝負は……」

無骨で言葉を知らないルイが、この不都合な空気に反論するのに、ようやく彼の固い頭に血が巡ったようだ。

「ルイ、あなたまだ愚かなことを言っているのですか？」

「ですが、母上……アネモーネ殿……」

あわてて、ギョイエン又従子爵家の二男は同意を求めて対戦相手の美貌を見つめる。アネモーネは、この場のすべての責任者は、朝日に身体が温まるを待ったかのように一呼吸入れると口を再び開いた。

「久しぶりに、武人として戦ったような気がします。すばらしい干戈でした」

「え？アネモーネ殿は戦に行かれたことがあるのですか？」

自分よりもかなり年下と思われる令嬢が、初陣もまだ、であるにもかかわらず、当分、大きな戦いはナント王国内において起きてないのだが、当然だが……、あたかも戦場を経験しているかのような言いようは、ルイでなくとも当惑させられた。

しかし、アンリは、彼の発言を計算の上であると理解した。その真意も根拠もあきらかではないが、なんとなく、これまでの主君の行動と発言からしてそのような気がするのだ。

おそらく、外国のことだろうと、おそらくルイは自分を無理やり納得させたのだろう。そちらからの情報を楽しみにしていることを、兄は知っている。彼は初陣を飾りたくてたまらないのだが、ナント王国の事情がそれを許さない。

そういうことで、アンリはそのていどのことは見透かしているのだが、しかし、彼よりもそれ

を正確に見越しているのは、母親のような気がした。

「…ということで、侍女もやってきました。朝食ができたのですね」

いつの間にか、一人の少女が侍女たちを引き連れて集合していた。きっと、アンリが伯爵の城に出仕してから招き入れた子であろう。どこぞの中小貴族の娘か、彼はそういう話は聞いていなかった。少なくとも、以前は見かけたことがない。

母親の様子からかなり可愛がっているようだ。この家も自分が旅立ってからいささか空気が変わったような気がする。少しばかりさみしい気持ちを否定できない。そういうアンリの気持ちを察するように、アネモーネは寄り添ってきた。何と、少女の柔らかな肉感まで伯爵は偽るつもりらしい。

直参の家臣にだけわかるように、いたずらっぽい笑顔まで送ってくる。

しかし、それは錯覚であることはすぐにわかった。なんとなれば、二人は密着していない。思い過ごしとは恥ずかしい限りだ。

「……」

ふと、伯爵と母親を見比べると無言で面白いやりとりをしていたのが見て取れた。

アデライードは、息子のいたずらを戒めるような視線を送っているし、伯爵は、伯爵でいたずらの現場を発見された子どものような顔を続けている

口笛を吹いてもおかしくない風情だ。もっとも、良家の令嬢、という設定であるアネモーネがそんなはしたない真似をするわけもなからう……が。

いったい、いつまでこのような凝固状態が続くのだろうか？アンリは呆れていたところ、さすがに母親である女主人が、みなを城に導きいれようとした。おそらく、朝食はすでに冷めてしまっていることであろう。